



チームのために、 自分にできること

【ウィルチェアーラグビー】

バレーボールと同じ大きさのボールを、投げる、転がす、バスケットのようにドリブルする、膝の上に乗せて運び、ボールを持った選手の車いすの2輪がゴールライン上に達すれば得点になる。ただし、10秒間に一度はボールをドリブルするかパスをしなければならぬ。日本では、1996年に正式に紹介され、1997年に日本ウィルチェアーラグビー連盟が設立された。2000年のシドニーパラリンピックから公式競技となっている。

[第53回]

ウィルチェアーラグビー選手

岸 光太郎さん

コートの中を縦横無尽に走り回る車いすが、激しい音をたててぶつかり合う——ウィルチェアーラグビー（車いすラグビー）の魅力は、そのスピード感と格闘技さながらの迫力だ。この競技が日本に紹介された直後からプレーをする岸光太郎さんは、チーム「AXE（アックス）」のリーダーであり、日本有数のプレーヤー。コートの中でも、コートの外でも、つねにチームを支えている。

ごく普通の大学生生活を過ごしていた岸光太郎さんが不慮の事故に遭ったのは、就職先も決まっていた大学4年の冬。頸髓(けいずい)を損傷する重症で、手術後のリハビリテーションは2年以上に及んだ。

リハビリテーションセンターを退所するとき、「体力をつけるために何かスポーツをしたい」と担当の体育教官に相談した際に薦められたのが、ウィルチェアーラグビーだった。

「試合を見学して、すぐに“やってみたい”と思いました。車いすがバンバンぶつかって、その激しさに圧倒されたのです。競技用の車いす自体のカッコよさにも惹かれました」

当時ウィルチェアーラグビーは日本に紹介されたばかり。草の根的にやっている人はいたがまだまだ普及しておらず、競技用の車いすを手に入れるのにも苦労した。岸さんは知人に譲ってもらい、競技人生をスタートさせる。

* * *

ウィルチェアーラグビーは、各チーム4名の選手がコート上でプレーする。選手には障がいのレベルに応じて0.5点から3.5点まで7段階の持ち点が与えられており、4選手の合計が8.0点を越えてはならないというルールがある。岸さんの持ち点は0.5点。最も障がいの重いレベルの選手だ。

「ウィルチェアーラグビーの大きな特徴は、相手の車いすに自分の車いすを衝突させて動きを止める“タックル”が認められていることです。自分の役割は、タックルで相手の攻撃を防いだり、ゴールに近寄れないように相手の前に走ってガードしたりすること。守備用の車いすには、タックルするために前面の部分にバンパーが張り出していて、これを相手の車いすにひっかけて動きを止めるのです」

岸さんの相手の動きを封じ込めるテクニックは、攻撃の際にも生かされる。ゴールライン手前の「キーエリア」に守備側の選手は3人まで入れるが、味方がゴールラインを突破するには相手選手をキーエリア内で寄せて、走り抜けるスペースを作る必要がある。

「味方がおとり役になって引き付けた相手選手を自分がロックしておくことで、できたスペースが保持できて味方がゴールしやすくなります」

まさに、味方がゴールし、相手にゴールを許さないための縁の下の力持ちといった存在だ。ウィルチェアーラグビーは、チームスポーツならではの選手の連携や相手選手との駆け引き、さらには

コート上の選手のメンバー構成など、戦術が勝負の大きな分かれ目になる。

「激しさに惹かれてウィルチェアーラグビーを始めましたが、戦術面の奥深さにおもしろさを感じます。障がいが重くすばやい動きが苦手でも、“自分はここまでできるから、こうやればいいんじゃないか”と考えてプレーすることができます」

* * *

コートの中で、守備の要、攻撃の脇役としてチームを支える岸さんは、コートの外でもチームを支える大黒柱になっている。現在の所属チームは、2007年に“自分の目指すチームを地元の埼玉県で作りたい”との思いから仲間と創設した「AXE(アックス)」だ。メンバーに練習日程を伝えたり、AXEのWebサイトやFacebookを作成・更新して情報発信したり、「リーダーというよりも、“雑用係”“学級委員”」と謙遜するが、練習メニューを作ったり、他チームのメンバーとの交流を行うなど、“チームを強くするためには”を常に考えている。

「当たり前のことですが、結成当初は弱小チームでした。そんなチームが、みんなで戦術を練り、練習を重ねていくことで徐々に強くなってきているのがうれしいですね」と岸さん。

ウィルチェアーラグビーの日本選手権は、リーグ戦の上位8チームで日本一を争う。2015年12月の日本選手権でのAXEの成績は3位。結成以来、着実に順位は上がっているが、まだ優勝経験はない。

「AXEを日本一にしたいというのが大きな目標です。チームの連携を高めたり、戦術を磨くなどの組織力の強化こそが鍵だと思っています」

* * *

「チームのメンバーやリハビリセンターの方など、いろいろな人に支えられて、今の自分がある」と振り返る岸さん。そうした思いこそが、チームのために自分の役割をまっとうする岸さんの源になっているに違いない。



きし こうたろう

1997年よりウィルチェアーラグビーを始める。2007年に自らが中心となってチーム「AXE(アックス)」を創設。ロンドンパラリンピックにも出場した日本を代表するプレーヤー。

<http://www.wakuwaku-works.com/axe/>